

草津市立矢倉小学校通信 令和4年3月3日 NO.19



やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

一年生になって、一番うれしかったこと

この一年をふりかえって、自分が大きくなれたなあ、うれしいなあと思えた一番のできごとは何かなあ…こんな問いかけに、一年生の子どもたちは、字が書けるようになったことだと多くの子が答えたとのこと。担任の先生から全職員へ伝えられたすてきな子どもの姿である。

一年間をふりかえっての発表は、たいていがんばったこと、うれしかったことである。それは、縄跳びが跳べるようになったとか、逆上がりができるようになったとか、ずっと手に入れたかったものがようやく自分のものになったなど、これまでくりかえし挑戦したこと、ずっと抱いていた願いごとがかなったと言葉にすることが多い。そんなありきたりのことを思い込んでいた私は、それ以上のできごととして字が書け、見たことや感じたこと、思っていることを、確実に相手に伝えられることがうれしいと、口々に発表する子どもたちの感性に深い感動を覚えた。

私の場合はどうだっただろう。今の子どもたちのように、喜んでいただろうかと思ひ起こしてみるのだが、あまりいい記憶はない。字を覚え、書き綴ることができるようになったことで、家族、とりわけ兄弟で交わした約束は、きちんと守ってくれるよさは確かにあった。それまでの口約束や指切りだったら、「え？そうだったかな」とごまかされてしまうことが多く、そのくやしきは解消した。しかし、一方で、あんな約束をしなければよかったと後悔することもあった。また、字を覚え始めると、親からさらにスムーズに書けるように練習させられ、ある程度上達してくると、今度は美しく整った字を書くようにしつけられ、おまけに宿題はきちんとしなくてはならなくなった。とにかくあの頃は大変だったなあ、余計に大変な目にあうようになったなあという、そんな感覚でしかない。なんともなさけない話だ。

あらためて、字が書けること、そして感じたまま、思った通りにものごとを語り、伝えることができることのありがたさを素直に喜びたいものだ。

校長 大林 道範